



大方あかつき館報

第27号
2017年6月発行

あかつき

静かな上林ブームの底流に

上林暁文学館 山沖 幸喜

又吉 ぼくが上林さんの「星を撒いた街」を読んで一番うわあって思ったのは、風景描写が登場人物の感情とすぐ結び付いているんですね。しかも、そうでありながら、その描写は（次第に）風景自体が主役になっていく。これは誰にもできひんような。

島田 風景描写っていうのは、本当に難しい。技量がないと退屈になるし、冗漫になる。

一昨年の十月、又吉直樹さん（お笑い芸人・芥川賞作家）と室戸生まれの島田潤一郎さん（「夏葉社」代表）、若いお二人が黒潮町で対談された。取り上げられたのは、同町出身の私小説作家上林暁とその作品。

高知新聞が五回にわたり連載記事を組んだ。直前に、「火花」が芥川賞を受賞した。そんなこともあつてか、当日会場前には、朝早くから、八百名近い方々が並んだ。結局百名を超える方が入場できなかった。その数か月前、「僕が上林暁にずっとハマってしまったのは、昨年はじめ、「星を撒いた街」を読んだのがきっかけでした。そこに描かれているささやかな人々の営みの美しさのようなものに魅かれたのです。／僕は、京都で音楽をやっております、三枚目のアルバム「紅い花」は、これをモチーフに作ったのです。／また音楽の縁で、ピースの又吉さんとも知り合い、交友が続いております。』

京都に住むフォーク歌手「世田谷ピンポンス」さんから葉書が届いた。彼は、「星を撒いた街」を読んで、矢も楯もたまらず、京都から車をとばし休館日を承知であかつき館を訪ねて来たという。さっそく返事を差し上げた。

このご縁をきっかけに、その後、夏葉社島田さ

んや京都・古書善行堂の山本善行さんの「文学講座」が実現した。その折、彼には「紅い花」を歌ってもらった。もちろん、又吉さんの対談の折にもこの本である。ここ数年、彼女は汽車を乗り継いで、遠路徳島から「文学講座」や「作品を読む会」にやって来る。会の後、しばしば上林暁顕彰会のメンバーと、駅前の居酒屋でビール片手に文学談議に花を咲かせる。そして、一九時四一分発最終特急列車の人となるのだ。

最近、若い人たちの間で静かな上林ブームが起きている。地味な私小説作家、上林暁にとっては、初めての出来事だともいえる。

そのきっかけの一つに夏葉社「星を撒いた街」「故郷の本箱」の出版があるのは間違いないだろう。それに、又吉さんが火をつけた。

だが、このブームはそれだけのことだったのか。もう少しブームの周辺をさぐってみたい。



又吉さんを囲んで
(あかつき館)



夏葉社「星を撒いた街」など

▼ある日、「職業聞き取り調査」にやって来た中学生たちに、逆に質問してみた。

「あなたが考える幸せって？」

生徒四名が異口同音に、こう答えた。

「いまあるあたりまえの生活が、あたりまえに続

く(ある)こと」

高度経済成長が始まり、いけいけどんどの時代に向かっていた中学時代の私だったら、

「都会に出ていい大学に入って、それから大きな会社に就職し、裕福な暮らしをすること」

なんて、能天気な答えを口にしてたかもしれない。還暦を過ぎたいまの私なら、「あたりまえの生活」その言葉のもつ意味や重さが、少しは理解できる。

でも、中学生たちのその答えには、正直ドキリとさせられた。この時代が抱える不安や閉塞感、戸惑いや焦燥、その中に、若者たちの思考もまた閉じ込められているのではないか。3・11以降、自然災害・原発事故などへの恐れ、無力感も微妙に反映されているのかもしれない。わずか30分余の中学生たちとの会話の中で、重い課題を丸ごとつきつけられたような気がした。

上林の小説集と随筆集を出版した夏葉社の島田さんは、一昨年あかつき館での「文学講座」で、こう話された。

「僕やたぶんピンポンズさんが上林に惹かれるのは、今、僕は生きるのがとても難しい時代だと思っていて、どういう風に生きていけばいいのかわからない。一方では、インターネットが盛んになって毎日のように情報が出てくる。沈黙して自分のスタイルを見つけないといけない。そうした中で上林の作品を読むと、とても励まされる気持ちがある。」

「奥様が発病され、生活も困窮を極める。その中で彼は文学を、本を頼りに生きていく。うまく言えないですけども僕は感動してしまうし、上林

のように強く生きていきたいというふうに思うわけです。」

いま起きている静かな上林ブームの底流に、こうした若者たちの抱える生きづらさ、閉塞感のよななものがあるのではないか。

そうした若者たちが、いま上林の小説に何かしらの癒しや励ましを感じ、求めてきているのではないかとフォーク歌手・世田谷ピンポンズさんは、上林の小説「星を撒いた街」から想を得てつくった「紅い花」のなかで、こう歌っている。

♪あの一つ一つに人の暮らしがあつて／夢も嘘も現実もあの町の一部分のさ／生きている人たちの営みの光だもの／君の胸に紅い花 きつといつか咲くでしょう／それを夢と呼びましょう 星を撒いた街の隅っこで♪



フォーク歌手・
世田谷ピンポンズ

▼一昨年、県内で巻き起こった「又吉フィーバー」の余話をひとつ、ふたつ紹介して、この話を閉じたい。

「じょうりんやき」の窯元

上林暁顕彰会M理事さんが来館され、「面白い話を聞いてきた」と語ってくれた。

ある喫茶店にやって来たお客さん、

「この間の又吉さんの上林焼(じょうりんやき)の話、聴きたかったがやけんじ。」

どうも「暁」を「焼」と見間違ひ。さらに、「作

家名」を「陶磁器の窯元」か何かと勘違いされての話だったらしい。

「ま・た・き・ち」騒動

似たようなことは、図書館窓口でもあった。ある日みえられたご年配の女性、「あのう、又吉(またきち)さんの『花火』(はなび)は借りられますか。」とのこと。窓口の職員は、「ま・た・き・ち? は・な・び?」一瞬対応に困ったそうである。

だが、そこはさすがにあかつき館のベテラン職員。すぐに察して、「又吉さんの火花は、いま返却待ちになっております。」と、すまして応えたとのこと。

一方、高知の街でも、こんな珍現象が見られた。**なんと、三冊もトップ10入り**

日曜日ごとに高知新聞が載せている「今週のベストセラーズ」(高知市内K書店調べ)、1位「火花」、6位「星を撒いた街」8位「ツエッペリン飛行船と黙想」9位「故郷の本箱」。なんと上林の本三冊が、トップ10入りしていた。かつて上林にこんなことがあっただろうか。まるで、新人の流行作家のような反響ぶり。マスコミと又吉効果おそるべし。

夢かまことか、店内に平積みされて

その週の木・金曜日、職員4人で高知市まで新刊本の選書・購入に出かける。新装なったK書店で、図書館の本をどっさり仕入れることにする。何と店内に入ると、又吉さんの「火花」と一緒に「星を撒いた街」「故郷の本箱」「ツエッペリン飛行船と黙想」の三冊が、カウンター前に平積みされているではないか。「ベストセラーズ」のランキングは、夢ではなかったのだとあらためて納得する。

今では、すっかり落ち着きを取り戻し、元の静けさが戻っている。あの騒動は、いったい何だったのだろうか。だが、いまも静かに上林ブームが続いている…と、私は確信している。

〈現在、高知民報に連載中の文章(二部)に加筆し掲載。〉

2017年度 主な催しもの

文学館企画展

■第24回企画展

「あやに愛しき」

〜病妻繁子との切なき日々をつづりて〜

期間 4 / 1 ~ 6 / 25

(詳細は、4面参照)

■特別企画展

「世界の果てのごどもたち」

〜西土佐村満州開拓団の記録〜

期間 7 / 1 ~ 9 / 24

悲惨な歴史の記録、満州開拓団の資料を多数展示。合わせて、その事実を題材に描かれた中脇初枝さんの小説「世界の果てのごどもたち」の校正稿なども展示する。

■第25回企画展

「林嗣夫・詩の世界」

〜言葉を自らの現実の中で語り直すとき〜

期間 10 / 1 ~ 12 / 27

「自分の経験を通さなければ言葉は生きてこない」

ひたむきに詩や言葉にむきあい続ける林嗣夫、その詩人としての軌跡を著書や作品を通して紹介する。

■第26回企画展

「芸芸誌『大形』とともに」

〜創刊300号の歩みをたどる〜

期間 〈2017〉 1 / 6 ~ 3 / 25

旧大方町公民館文学学級の活動から生まれた芸誌「大形」、創刊以来52年300号、営々と綴り続けられたその歩みを、作品や写真などで紹介する。

2017 あかつき館の催しもの

上林暁文学館

◇第13回上林暁忌短歌大会

日時 7 / 22 (土) 13時 ~ 16時半

会場 黒潮町保健福祉センター・大ホール

講師 大島史洋先生(結社「未来」選者)

◇上林暁文学講座(大方あかつき館 / 14時 ~ 16時)

*第一回 『西土佐村満州開拓団の記録』

日時 7月中旬(予定)

講師 (対談) 武田邦徳さん(四万十市)

*第二回 『祖父上林暁の文学を語る』

日時 10月8日(日)

講師 大熊平城さん(上林暁孫・神奈川)

*第三回 『詩の世界を語る』

日時 12月上旬(予定)

講師 林嗣夫さん(詩人・高知市)

◇上林暁の作品を読む会(大方あかつき館 / 14時 ~ 16時)

*第17回 6 / 17 (土) 「スケッチブック」(全集6)

*第18回 8 / 19 (土) 「晩春日記」(全集5)
*第19回 11 / 18 (土) 「ちははの記」(全集2)
*第20回 2 / 17 (土) 「天草土産」(全集1)

◇第28回あかつき賞表彰式

日時 3 / 3 (土) 14時半

会場 あかつき館レクチャーホール

◇劇団「the創」・演劇公演

『びつたれの証』 ~ 上林暁の生涯 ~

日時 10 / 7 (土) 開場14時・開演14時半

会場 ふるさと総合センター

(共催・上林暁文学館&黒潮町民大学)

黒潮町立図書館

□夏休み映画上映会(2作品)

日時 8 / 6 (日) ①10時 ~ ②14時

会場 あかつき館レクチャーホール

□秋の名画座「あかつき」(2作品)

日時 11 / 11 (土) ①10時 ~ ②14時

会場 あかつき館レクチャーホール

□人形劇団「ブーク」・公演

『ハリネズミと金貨』 / 『ふしぎな箱』

日時 7 / 9 (日) 14時 ~ 15時

会場 あかつき館レクチャーホール

□感想画(にがおえ・イメージ)コンクール

募集 12 / 4 ~ 1 / 19

展示 2 / 23 ~ 3 / 11 (あかつき館)

表彰式 3 / 4 (日) 14時半

会場 あかつき館レクチャーホール



あかつき館*催し点描

町民ギャラリー

『碧き四万十』 ～芝崎静雄写真展～

10月1日～31日まで、1F町民ギャラリーで、黒潮町出身の写真家・芝崎静雄さん（松山在住）の個展が開かれた。

長年、故郷四万十川の風景を撮影しながら研鑽をつみ、応募展などにも数多く入選している。それらの作品を中心に数十点が展示された。町内外から多くの知人の方たちもみえられ、四季折々の四万十の美しい風景写真に魅入っていた。



第24回企画展

『あやに愛しき』

～病妻繁子との切なき日々をつづりて～

〈2017〉4/1～6/25

上林には「病妻物」とよばれる一連の小説がある。

のちに、宇野重吉の第一回監督作品「あやに愛しき」として、劇団民芸の手で映画化された。



それらの作品、関連資料、写真などを多数展示している。



一言感想

- *ビデオも見せていただき、読んだ幾作品か思い起こしました。(高知市・Kさん)
- *「聖ヨハネ病院にて」、戦後一年目で芥川賞は休止されていましたが、もし休止でなければ受賞していたのでは…とされています。(黒潮町・Mさん)
- *以前主人と一緒に来館したことを思い出します。本当に来てよかった。(黒潮町・Wさん)



「第27回 あかつき賞」5名が受賞!

今年で27回目を迎えた「あかつき賞」。今年度は町内5名の小学生が選ばれ、3月4日(土)午後1時半から、レクチャーホールで、表彰式が行われた。

受賞者並びに作品名は、次のとおりです。

- 小1・田辺唯愛(田ノ口小)「おねえちゃんになった」
- 小2・武政日向(佐賀小)「ブタンとり」
- 小3・川村米音(田ノ口小)「豆ふ作り」
- 小4・岩本ころ(南郷小)「家族の温かさ」
- 小5・秋田空星(田ノ口小)「だれもが幸せに」

*小6、中学生は、該当作品がありませんでした。

館長日記

～ブログ『クジラのあくび』より～

草野心平さんの校歌

2017.04.22

「ブログにあった上林さんの随筆『わが母校 中村高校』は、どこに書かれていますか?」

数日前、高新Hさんから取材の電話が入る。

「たしか、全集15の547ページにあったと思いますが。」

それから、話は草野心平作詞の校歌へと飛ぶ。

草野心平に校歌を作詞してもらった高校は、甲子園では縁起がいいのだとか。中村は準優勝をし、県内でもう一校ある室戸はベスト8に進出した。

40年前の春、中村が初戦に勝った時、心平さんはその作詞を依頼した方に、電報を打った。

『私の作詞した校歌が、初めて甲子園で流れた』と。

トウヒの種子

2017.05.05

読書ボランティアのSさんから、トウヒの種子が届く。

『東京にいる親戚に星野さんの本「旅をする木」の話を読んだら、いたく感動して「蓼科の山小舎の近くにトウヒの木があるので、送るから…」とのこと。やっと届きました。』

Sさんのメモが添えられている。

素敵なお裾分けに感謝しながら、急ぎ本棚から文庫本を抜き出し、P156のエッセイ「旅をする木」を開いてみる。

こんなとき、つくづくあかつき館に勤めていてよかったと思う。